パーソナリティ研究
2008　第17巻　第1号　60–71

原　著

© 日本パーソナリティ心理学会 2008

自己志向的完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討——抑うつ，ネガティブな反すうを媒介として[1),2),3)]

齋藤路子　目白大学大学院心理学研究科
沢崎達夫　目白大学人間学部
今野裕之　目白大学人間学部

本研究では，自己志向的完全主義（完全欲求，高目標設定，失敗過敏，行動疑念）と攻撃性（身体的攻撃，短気，敵意，言語的攻撃）および自己への攻撃性（自己への身体的攻撃傾向，自己への敵意）の関連を検討するために，大学生444名に対して，質問紙調査を行った。その結果，高目標設定は言語的攻撃と，失敗過敏は短気，敵意，自己への身体的攻撃傾向，自己への敵意と，行動疑念は敵意，自己への敵意と，それぞれ有意な相関があった。さらに，自己志向的完全主義が攻撃性，自己への攻撃性に至るプロセスに関するモデルを構成し，共分散構造分析による検討をしたところ，(a) 不適応的完全主義が強いほど，認知・情動的攻撃性が強まり，認知・情動的攻撃性が強いほど，自己への敵意が強まること，(b) 不適応的完全主義が強いほど，ネガティブな反すうが強まり，ネガティブな反すうが強まるほど抑うつが強まり，抑うつが強まるほど，認知・情動的攻撃性，自己への攻撃性に影響を与えることが示唆された。最後に，自己志向的完全主義が攻撃性および自己への攻撃性に至る認知プロセスについて議論した。

キーワード：自己志向的完全主義，攻撃性，自己への攻撃性，抑うつ，ネガティブな反すう

問題と目的

過度に完全を追求する傾向を完全主義 (Perfectionism) という。完全主義は心理的不適応を招きやすい個人特性と考えられている (Flett & Hewitt, 2002)。完全主義者は，完全でなければ意味がないとか，完全でなければ失敗と同じだと考える傾向が強いが，完全な状態が実現することは稀であるため，彼らは主観的に頻繁に失敗を経験することになる。実際，完全主義に関する多くの研究は，この個人特性が抑うつ，不安，自殺念慮，摂食障害，強迫性障害といった多くの不適応と関連することを示している (Flett & Hewitt, 2002)。

Flett & Hewitt (2002) によれば，不合理な信念，不適応的な態度の下位概念や摂食障害者の心理的特徴として，元来，完全主義は1次元的な概念として捉えられてきた。しかし，完全主義を多次元的な概念と見なす研究者も多い。たとえば Hewitt & Flett (1991) は，完全主義を多次元的な概念と考え，多次元完全主義尺度 (Multidimensional Perfectionism Scale: MPS) を作成している。具体的には，自己に向けられた完全主義に関する次元（自己志向的完全主義），他者に向けられた完全主義に関する次元（他者志向的完全主義），他者が自分に非現実的な要求を課しているという一般化さ

1) 本研究の一部は，日本パーソナリティ心理学会第15回大会 (2006)，日本心理学会第70回大会 (2006)において発表された。
2) 本論文は，第1著者が平成18年度目白大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を再分析し加筆・修正したものである。
3) 調査の実施にあたり，ご協力いただきました岡山大学教育学部寺澤孝文教授に心より感謝を申し上げます。

れた信念や認識に関する次元（社会規定的完全主義）の 3 次元である (Flett & Hewitt, 2002)。

しかし一方で，辻 (1992) のように，自己志向的完全主義のみが完全主義であるという立場から，自己志向的完全主義のみを取り上げる研究も増加している。たとえば桜井・大谷 (1997) は，自己志向的完全主義が高いほど抑うつや絶望感に陥りにくいという大谷・桜井 (1995) の結果を受けて，多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: MSPS) を作成した。この尺度は，4 つの下位尺度から構成されている。具体的には，完全でありたいという欲求 (desire for perfection) である「完全欲求」，自分に高い目標を課する傾向 (personal standard) である「高目標設定」，ミス（失敗）を過度に気にする傾向 (concern over mistakes) である「失敗過敏」，自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向 (doubting of actions) である「行動疑念」の 4 つである。本研究では，辻 (1992) と同様の立場をとり，自己志向的完全主義に着目する。

なお，近年になって，Saboonchi & Lundh (2003) は Hewitt & Flett (1991) の多次元完全主義尺度を使用して，自己志向的完全主義と特性怒りが関連することを明らかにした。また Fedewa, Burns, & Gomez (2005) は，Terry-Short, Owens, Slade, & Dewey (1995) のポジティブ・ネガティブ完全主義尺度を使用して，ネガティブ完全主義は敵意と関連することを指摘している。ネガティブ完全主義は，桜井・大谷 (1997) の自己志向的完全主義の不適応的側面（失敗過敏，行動疑念）に対応するものと考えられる。これらの研究から考えて，自己志向的完全主義は怒りや敵意と関連する可能性がある。まず，自己志向的完全主義者が怒りを感じやすい理由として，自己志向的完全主義者の自己に対し高くて非現実的な目標を定める傾向 (Tangney, 2002) が挙げられる。Izard（1991 荘厳監訳 1996）は，目標が達成されない経験は怒り感情を引き起こすとしている。つまり，自己に対し高くて非現実的な目標を定める自己志向的完全主義者は，目標が達成されたと感じることが少ないため，怒りを感じる事態に陥りやすいと思われる。次に，自己志向的完全主義者が敵意を抱きやすい理由として，自己志向的完全主義者が非現実的な目標を設定することにより，失敗とみなす範囲が非完全主義者よりも広く，自己を否定的に評価する傾向 (Tangney, 2002) が挙げられる。藤・湯川 (2005) は，自己に対する否定的な感情が他者から承認されないという認知を生み，その結果，他者に対する敵意的・猜疑的な見方を促進するとしている。自己に関する否定的な感情に囚われると，他者に対する認知が敵意的に歪むということである。この考えを援用すると，自己志向的完全主義によって生じる完全でない自己に関する否定的な感情が，他者から承認されないという認知を介して，他者に対する敵意的な見方を促進する可能性がある。

以上のことから，自己志向的完全主義者は怒りや敵意を感じやすい可能性がある。しかしながら，実証的検討はほとんどなされていない。また，敵意や怒りは攻撃性の認知・情動的側面であるが，行動的側面との関連は検討されていない。前述したように，自己志向的完全主義者は自己に対し高くて非現実的な目標を定める傾向があるため，目標が達成されたと感じることは少ないと考えられる。このことから，攻撃に関する古典的理論である欲求不満－攻撃仮説（Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939 宇津木訳 1959）に従うと，自己志向的完全主義者は欲求不満を抱く頻度が多く，それが攻撃として表出される可能性がある。そこで本研究の第一の目的は，自己志向的完全主義と行動的側面を含めた攻撃性の関連を検討することとする。これは同時に，自己志向的完全主義者の怒りや敵意が行動的に表出されるかどうかという点の検討でもある。また，自己志向的完全主義の 4 つの下位概念（桜井・大谷，1997）のいずれの側面が攻撃性と関連を持つのかについての検

討も行う。

なお，既に述べたように，Tangney (2002) は，自己志向的完全主義者が自己を否定的に評価すると指摘している。また，完全主義者は強烈な自己批判によって苦しむという指摘 (Blatt, 1995) や，自分の短所を追及するという指摘（Burns, 1999 野村・夏苅・山岡・小池・佐藤・林訳 2005）もある。このような特徴から考えて，自己志向的完全主義者は攻撃性を他者に向けるだけでなく，自分を敵視したり，あるいは自分自身を傷つけるといったように，攻撃性を自分自身に向ける可能性がある。このことを間接的に支持する知見として，自己志向的完全主義と自殺念慮 (Hewitt, Flett, & Weber, 1994)や摂食障害（たとえば，横山・小山，2005）との関連がある。自殺念慮は自己破壊衝動のあらわれと解釈できることから，攻撃性が自分自身に向いた状態と考えられる。同様に，自分の身体に過剰な負荷をかける摂食障害も自分への攻撃性として捉えることができる。以上から，自己志向的完全主義者は自分に対して敵意を抱いたり，自分自身を心理的・身体的に傷つけようとする傾向を持つことが予測できる。そこで本研究の第二の目的は，自分自身に向けられた攻撃性を自己への攻撃性と呼び，自己志向的完全主義と自己への攻撃性の関連を検討する。また，自己志向的完全主義の4つの下位概念のいずれの側面が自己への攻撃性と関連を持つのかについての検討も行う。

最後に，本研究の第三の目的として，不適応的完全主義と他者および自己への攻撃性の関連について総合的に検討するために，共分散構造分析を用いて，不適応的完全主義から他者および自己への攻撃性に至るまでのプロセスについて検討を行う。前述したように，自己志向的完全主義には4つの下位概念があるが，このうち，「高目標設定」は抑うつや絶望感と負の相関であるが，「失敗過敏」「行動疑念」は抑うつや絶望感と正の相関があることが示されている（桜井・大谷，1997）。つまり，自己志向的完全主義には「高目標設定」という適応的側面と，「失敗過敏」および「行動疑念」という不適応的側面（この2つを総称して，以降不適応的完全主義とする）の2側面があるということである。なお，「完全欲求」は完全主義的な行動傾向全体に共通する傾向であり，完全欲求のみでは精神的健康とほとんど関連がないとされている（桜井・大谷，1997）。本研究は，心理的不適応に影響する個人特性としての完全主義に関心があることから，共分散構造分析による検討においては，不適応的完全主義のみを取り上げる。その際，不適応的完全主義が他者および自己への攻撃性と直接関連を有するのか，それとも何らかの心理変数を媒介として間接的な関連を持っているのかについては注意が必要であろう。特に，従来から不適応的完全主義と抑うつの関連が指摘されているが（たとえば，桜井・大谷，1997），抑うつ者が高い攻撃性を有するということもまた多くの研究者が指摘するところであり（たとえば，鈴木・安齊，1999），不適応的完全主義が直接的に他者および自己への攻撃性を強めるのではなく，不適応的完全主義が抑うつをもたらし，抑うつが他者および自己への攻撃性を促進しているという可能性も十分考えられる。そこで，モデルの検討に際しては，不適応的完全主義と他者および自己への攻撃性の間を抑うつ状態が媒介するかどうかについても検討する。その際，抑うつの脆弱要因とされ，不適応的完全主義との関連が示されているネガティブな反すう（伊藤・上里，2002）もモデルに組み込むこととする。ネガティブな反すうとは「その人にとって，否定的・嫌悪的なことを長い間繰り返し考えること」（伊藤・上里，2001）である。荒井・湯川 (2006) は，ネガティブな反すうが怒りの持続しやすさを媒介して特性怒りが強まるということを見出した。伊藤 (2004) は，完全主義といった心理的要因だけでは抑うつの持続，重症化は起こらず，抑うつの持続，重症化が引き起こされるには，ネガティブな反すうが介在する

と指摘している。これらの知見から，ネガティブな反すうが抑うつを媒介して，他者および自己への攻撃性を強めている可能性が考えられる。同様に，完全主義者は非生産的で自己批判的な反すうに陥る (Burns, 1980) ことから，自己の不完全性を繰り返し考えるというネガティブな反すうが加わって，抑うつ状態になったときに，他者および自己への攻撃性が生起する可能性がある。そこで本研究では，不適応的完全主義と他者および自己への攻撃性の関連について，両者の媒介要因として，抑うつ状態とネガティブな反すうを取り上げて検討する。

方　法

調査時期

2006 年 5 月下旬から 7 月下旬にかけて実施した。

調査対象者

東京都および岡山県の大学に通う大学生であった。回答に不備のあった者を除き，444 名（男性 132 名，女性 312 名）を分析対象とした。対象者の平均年齢は 20.06 歳 (SD=1.91) であった。

調査の手続きおよび倫理的配慮

講義時間中に質問紙を配布して調査を依頼し，回答終了後その場で回収した。なお，調査への参加は自由意思によること，無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られることを文面および口頭で説明した。

調査内容

自己志向的完全主義　桜井・大谷 (1997) による多次元自己志向的完全主義尺度（20 項目）を用いた。この尺度は，「完全欲求」「高目標設定」「失敗過敏」「行動疑念」の 4 下位尺度からなる。回答は「1 全くあてはまらない」から「5 非常にあてはまる」の 5 件法により評定を求めた。

ネガティブな反すう　伊藤・上里 (2001) によるネガティブな反すう尺度（11 項目）を用いた。この尺度は，ネガティブな反すうをしやすい傾向を測定する「ネガティブな反すう傾向」，ネガティブな反すうをコントロールできるかどうかを測定する「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の 2 下位尺度からなる。回答は「1 あてはまらない」から「6 あてはまる」の 6 件法により評定を求めた。

抑うつ　Center for Epidemiological Studies Depression Scale (CES-D) の矢冨，Liang, Krause, & Akiyama (1993) による翻訳（20 項目）を用いた。この尺度は，「うつ感情」「身体的症状」「対人関係」「ポジティブ感情」 の 4 下位尺度からなる。回答は「0 そういうことはほとんどなかった」から「2 よくあった」の 3 件法により評定を求めた。

攻撃性　安藤・曽我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井 (1999) による日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（22 項目）を用いた。この尺度は，身体的な攻撃反応を測定する「身体的攻撃」，怒りの喚起されやすさを測定する「短気」，他者に対する否定的な信念・態度を測定する「敵意」，言語的な攻撃反応を測定する「言語的攻撃」の 4 下位尺度からなる。回答は「1 まったくあてはまらない」から「5 非常によくあてはまる」 の 5 件法により評定を求めた。

自己への攻撃性　自己への攻撃性を測定するために，敵意的攻撃インベントリー（秦，1990）のうち「身体的暴力」「敵意」「いらだち」の 3 下位尺度と，日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤他，1999）のうち「身体的攻撃」「敵意」の 2 下位尺度を参考に作成した 19 項目を用いた (Table 1)。なお，敵意的攻撃インベントリーの「言語的攻撃」「間接的攻撃」「置き換え」の 3 下位尺度と，Buss-Perry 攻撃性質問紙の「短気」「言語的攻撃」の 2 下位尺度については，自己への攻撃性に置き換えることが困難であると判断したため，参考にはしなかった。教示文については，Buss-Perry 攻撃性質問紙と同様の文章にし，5 件法（「1 まったくあてはまらない」から「5 非常によくあてはまる」）により評定を求めた。

Table 1　自己への攻撃性尺度の因子パターン行列と各項目の平均値，標準偏差 (*N*=444)

	項　目	*F*1	*F*2	*M* (*SD*)
〈*F*1：自己への身体的攻撃傾向〉				
15	私は，自分の身体をいじめたくなることがある	**.92**	−.21	1.60 (.95)
16	私は，かっとなって，自分をたたきたくなることがある	**.90**	−.10	1.83 (1.13)
14	私は，不満解消のためには自分に対する暴力もやむを得ないと思う	**.83**	−.09	1.70 (.98)
2	私は，ちょっとしたことで，思わずひどく怒って自分に乱暴してしまいたいと思うことがある	**.78**	.03	2.12 (1.20)
13	私は，自分をばかにしたり，自分に意地悪をしたいと思うことがある	**.73**	.03	1.81 (.97)
1	私は，思わず自分に暴力を振るってしまいたいと思うことがある	**.69**	.11	2.27 (1.27)
12	私は，自分を苦しめたいと思うことがある	**.66**	.09	2.02 (1.12)
11	私は，気に入らないことがあると，自分に当たり散らすようなことがある	**.61**	.24	2.28 (1.08)
17	私は，どんなに腹が立っても，自分をたたくようなことはしない＊	**.50**	.14	2.41 (1.37)
〈*F*2：自己への敵意〉				
5	私は，自分が気に入らない	−.15	**.84**	3.14 (1.16)
7	私は，自分が嫌いだ	.00	**.84**	2.63 (1.28)
4	私は，自分をさげすんだり，ばかにはしない＊	−.05	**.76**	3.19 (1.15)
8	私は，よく自分にいらいらする	−.02	**.76**	3.15 (1.22)
3	私は，自分を憎らしいとは思わない＊	.03	**.71**	2.95 (1.17)
10	私は，ささいなことで自分にイライラすることはない＊	.06	**.60**	3.13 (1.16)
6	私は，自分がいなくなった方が良いと思う	.24	**.58**	2.21 (1.17)
〈削除項目〉				
9	私は，物事がうまくいかないと，気持ちがイライラして，すぐ自分にあたる	.41	.42	2.47 (1.07)
18	私は，どんな理由があっても，自分に対する暴力はいけないと思う＊	.28	.24	2.67 (1.24)
19	私は，他者の気分を害する自分は，他者に殴られても仕方ないと思う	.23	.16	2.55 (1.17)
	因子間相関	—	.61	

注．＊は逆転項目を表す。

結　　果

自己への攻撃性を測定する質問項目の分析

はじめに，今回新たに作成した自己への攻撃性尺度19項目に対して因子分析（主因子解，プロマックス回転）を施したところ，固有値の減少傾向と因子の解釈可能性から2因子が妥当であると判断した。結果をTable 1に示す。

次に，各因子に高い負荷を示す項目群の内容から，因子の意味について検討した。いずれの項目群も内容的に概ね統一性が見られた。第1因子は9項目からなり，「私は，自分の身体をいじめたくなることがある」や「私は，かっとなって，自分をたたきたくなることがある」といった自分の身体を攻撃しようとする傾向を示す項目からなる。そこで第1因子を「自己への身体的攻撃傾向」と命名した。この因子は，自己への攻撃性の中でも行動的側面を表す項目によって概ね構成されている。第2因子は7項目からなり，「私は，自分が気に入らない」や「私は，自分が嫌いだ」といった自分への敵意の抱きやすさを示す項目群からなる。そこで第2因子を「自己への敵意」と命名した。この因子は，自己への攻撃性の中でも認知的側面を表す項目によって構成されている。

以上の因子分析により構成した自己への攻撃性尺度の内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を求めたところ，「自己への身体的攻撃傾向」因子はα=.92，「自己への敵意」因子はα=.89であった。

各変数の基本統計量

Table 2に各変数の平均値および標準偏差を示す。内的整合性について検討するため，Cronbach

の α 係数を求めたところ，各変数において概ね.70以上の値が得られた。

自己志向的完全主義と攻撃性の関連

自己志向的完全主義と攻撃性の関連を検討するために，各変数間の相関係数を求めた (Table 3)。その結果，「高目標設定」は「言語的攻撃」(r=.23, p<.01) と，「失敗過敏」は「短気」(r=.25, p<.01)，「敵意」(r=.33, p<.01) と，「行動疑念」は「敵意」(r=.25, p<.01) と，それぞれ有意な正の相関が認められた。「完全欲求」と「短気」「敵意」「言語的攻撃」の関連および「行動疑念」と「短気」の関連については，相関は有意であるものの，ごく弱い関係であった。

自己志向的完全主義と自己への攻撃性の関連

自己志向的完全主義と自己への攻撃性の関連を検討するために，各変数間の相関係数を求めた (Table 3)。その結果，「失敗過敏」は「自己への身体的攻撃傾向」(r=.24, p<.01)，「自己への敵意」(r=.36, p<.01) と，「行動疑念」は「自己への敵意」(r=.29, p<.01) と，それぞれ有意な正の相関が認められた。「行動疑念」と「自己への身体的攻撃傾向」の関連については，相関は有意であるものの，ごく弱い関係であった。

不適応的完全主義，ネガティブな反すう，抑うつ，攻撃性，自己への攻撃性の関連

不適応的完全主義から他者および自己への攻撃性に至るまでのプロセスについて検討するために，共分散構造分析を行った。なお，分析には，使用する観測変数の項目に完全に回答した 405 名（男性 119 名，女性 286 名）のデータを分析に用いた。

(1) モデルの構成

モデルでは，自己志向的完全主義の不適応側面である「失敗過敏」「行動疑念」の双方と有意な相関が認められた変数のみを分析モデルに組み込むこととし，これらの各下位尺度の得点を観測変数とした。その際，他者への攻撃性に関しては，「身体的攻撃」「言語的攻撃」といった行動的側面の攻撃性は，「失敗過敏」「行動疑念」と関連は認められなかったため，共分散構造分析においては，攻撃性の行動的側面を組み込まないで検討することとする。また，「失敗過敏」「行動疑念」と関連のあった「敵意」「短気」は行動に表出されない認知・情動的攻撃性であるといえる。そこで，「敵意」「短気」に共通する潜在変数を仮定し，これを「認知・情動的攻撃性」とした。さらに，自己への攻撃性に関しては，「自己への身体的攻撃傾向」は自己への攻撃性の行動的側面である一方で，「自己への敵意」は認知的側面であるため，1つの潜在変数に集約せず，各観測変数をそのままモデルに組み込むこととした。

本研究では，問題部分で述べたように，不適応的完全主義によって認知・情動的攻撃性および自己への攻撃性が生じると考え，不適応的完全主義を外生変数，認知・情動的攻撃性および自己への攻撃性に関する変数群を内生変数としてモデル化した。具体的には，不適応的完全主義から認知・情動的攻撃性，自己への敵意，自己への身体的攻

Table 2　各変数の基本統計量 (N=444)

	M (SD)	α 係数
自己志向的完全主義		
完全欲求	16.21 (3.95)	.82
高目標設定	17.55 (3.47)	.73
失敗過敏	13.29 (3.90)	.76
行動疑念	17.80 (3.56)	.68
攻撃性		
身体的攻撃	16.88 (5.28)	.83
短気	14.64 (4.29)	.79
敵意	19.07 (4.45)	.80
言語的攻撃	14.61 (3.74)	.77
自己への攻撃性		
自己への身体的攻撃傾向	18.00 (7.81)	.92
自己への敵意	20.40 (6.49)	.89
ネガティブな反すう		
反すう傾向	25.33 (8.18)	.90
反すうのコントロール不可能性	13.58 (4.16)	.80
抑うつ		
うつ感情	4.63 (3.68)	.84
身体的症状	3.75 (2.55)	.65
対人関係	.71 (1.07)	.70
ポジティブ感情	3.71 (1.82)	.64

Table 3　各変数間の相関係数 (N=444)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
自己志向的完全主義									
1. 完全欲求	—								
2. 高目標設定	.58**	—							
3. 失敗過敏	.51**	.18**	—						
4. 行動疑念	.46**	.25**	.38**	—					
攻撃性									
5. 身体的攻撃	−.02	−.04	.08	.02	—				
6. 短気	.11*	.02	.25**	.16**	.48**	—			
7. 敵意	.12*	.01	.33**	.25**	.41**	.41**	—		
8. 言語的攻撃	.14**	.23**	−.04	−.08	.24**	.16*	−.07	—	
自己への攻撃性									
9. 自己への身体的攻撃傾向	.05	−.06	.24**	.12*	.28**	.29**	.34**	.04	—
10. 自己への敵意	.07	−.06	.36**	.29**	.20**	.32**	.53**	−.17**	.59**
ネガティブな反すう									
11. 反すう傾向	.26**	.06	.47**	.40**	.08	.32**	.36**	−.16**	.34**
12. 反すうのコントロール不可能性	.09	−.08	.28**	.22**	.02	.26**	.22**	−.31**	.18**
抑うつ									
13. うつ感情	.21**	.04	.29**	.22**	.09	.28**	.34**	.02	.33**
14. 身体的症状	.23**	.12*	.26**	.25**	.12*	.21**	.29**	.04	.31**
15. 対人関係	.12*	.05	.24**	.19**	.20**	.25**	.41**	.00	.39**
16. ポジティブ感情	.01	.11*	−.22**	−.05	−.15**	−.14**	−.21**	.04	−.28**

*p<.05, **p<.01

撃傾向へのそれぞれへの直接パスを想定した。同時に，不適応的完全主義からネガティブな反すうおよび抑うつを媒介して認知・情動的攻撃性，自己への敵意，自己への身体的攻撃傾向への間接パスを想定した。また，行動的側面である自己への身体的攻撃傾向は，認知・情動的攻撃性と自己への敵意に影響を及ぼすとは考えにくいが，認知・情動的攻撃性および自己への敵意は相互に関連しながら，自己への身体的攻撃傾向に対して影響を与えている可能性がある。そこで，認知・情動的攻撃性と自己への敵意の間に双方向のパスを想定し，自己への身体的攻撃傾向を最終的に説明される変数として位置づけた。

(2) モデルの検討

このモデルに対して，最尤法により共分散構造分析 (SEM) を行った。有意でないパスを削除し，再度分析を行い，適合度が最も良くなる時点まで分析を繰り返した。その際，ネガティブな反すうを組み込まないモデルも検討したが (GFI=.97, AGFI=.94, RMSEA=.06)，ネガティブな反すうを組み込んだモデルの方がわずかながら適合度が良かったため，ネガティブな反すうを組み込むモデルを採用することが妥当であると判断した。その結果，Figure 1 に示したモデルが最終的に得られた。最終的なモデルの適合度指標は GFI=.97，AGFI=.94，RMSEA=.05 となり，モデルによるデータの説明率には問題がないと判断した。Figure 1 にあるすべてのパスの係数は 5% 水準で統計的に有意であった。また潜在変数から各観測変数に伸びるパスの係数もすべて有意であり，各構成概念は適切に測定されていると判断した。

潜在変数間の影響関係については，「不適応的完全主義」から「認知・情動的攻撃性」「ネガティブな反すう」にそれぞれ正の影響関係（順に.52，.75）が見られた。「ネガティブな反すう」は「抑うつ」に正の影響 (.58) を及ぼしていた。

10	11	12	13	14	15
—					
.50**	—				
.33**	.59**	—			
.47**	.49**	.27**	—		
.39**	.41**	.22**	.67**	—	
.43**	.35**	.19**	.56**	.43**	—
−.33**	−.16**	−.21**	−.23**	−.25**	−.16**

「抑うつ」から「認知・情動的攻撃性」「自己への敵意」「自己への身体的攻撃傾向」にそれぞれ正の影響関係（順に.33，.21，.14）が見られた。「認知・情動的攻撃性」から「自己への敵意」に対する正の影響関係 (.60) が見られた。「自己への敵意」から「自己への身体的攻撃傾向」に対する正の影響関係 (.51) が見られた。モデルは「自己への身体的攻撃傾向」の分散の約 36% を説明していた。

考　　察

自己志向的完全主義と攻撃性の関連について

本研究の第一の目的は，自己志向的完全主義と行動的側面を含めた攻撃性の関連を検討することであった。分析の結果，高目標設定は言語的攻撃と関連していた。言語的攻撃は，項目内容（例：「友達の意見に賛成できないときには，はっきり言う」「自分の権利は遠慮しないで主張する」）から考えて，自分の権利や要求を適切に主張できる

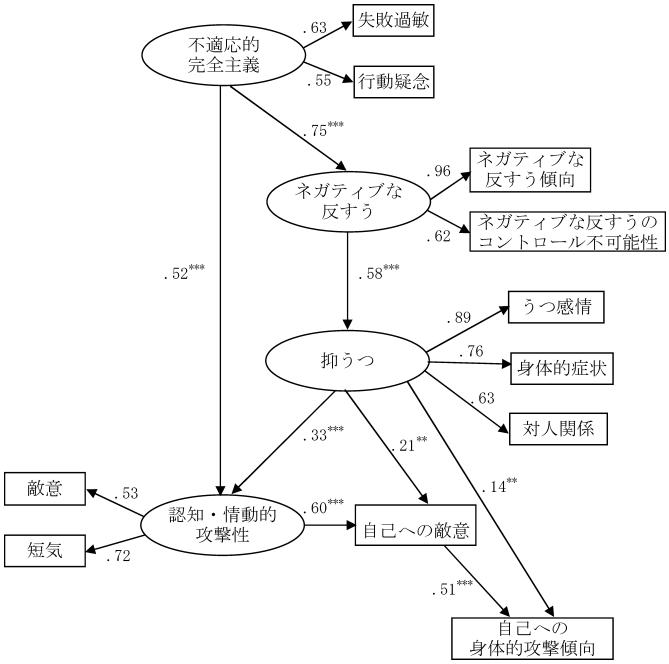

Figure 1　不適応的完全主義，ネガティブな反すう，抑うつ，攻撃性，自己への攻撃性に関するモデルと分析結果
注．数値は標準化された因果係数を表す。また，誤差変数は省略した。
**p<.01, ***p<.001。

という攻撃性の中でもおそらく適応的側面であると考えられる。言語的攻撃が高目標設定と正の関連を示したことは，高目標設定が適応的な完全主義であるという従来の知見（桜井・大谷，1997）と整合的な結果と言える。

一方，短気，敵意，身体的攻撃は攻撃性の不適応的側面であるが，失敗過敏は短気，敵意といった認知・情動的側面の攻撃性と関連し，行動疑念は敵意と関連していた。失敗過敏と行動疑念は不適応的な完全主義である（桜井・大谷，1997）。しかし，不適応的な完全主義は認知・情動的側面の攻撃性とは関連していたが，行動的側面の攻撃性とは関連していなかった。最近になって，東 (2007) は，自己志向的完全主義者が他者の存在を想定することで，不適応に陥る可能性を指摘し，「真に自己に求める完全性」と「他者の存在を気にかけてしまい他者を意識することでさらに自己に完全性を求める」という2側面の自己志向的完全主義を見出した。この研究では，後者の側面と不適応的完全主義が関連することも示されている。本研究の今回の結果は，仮に自己志向的完全主義者が怒りや敵意を抱いたとしても，他者からの拒否を避けるために行動に表出しないということを示唆している可能性がある。

自己志向的完全主義と自己への攻撃性の関連について

本研究の第二の目的は，自己志向的完全主義と自己への攻撃性の関連を検討することであった。分析の結果，失敗過敏は自己への身体的攻撃傾向および自己への敵意と関連し，行動疑念は自己への敵意と関連していた。従来から，完全主義者が強烈な自己批判によって苦しむ (Blatt, 1995)，自分の短所を追及する（Burns, 1999 野村他訳 2005）といった認知的特徴を持つことが指摘されている。さらに大谷 (2004) は，失敗過敏傾向の高い者が不完全な自分と直面する状況で自己非難的に振る舞うということを明らかにしている。不適応的完全主義者が攻撃性を自己に向けるという今回の結果は，強烈な自己批判が自己への攻撃性として現れる可能性を示していると思われる。

林 (2001) は，完全主義者は他者から自己の一部分を否定された場合，自己の人格そのものや存在価値が否定されたと認知しやすいということを指摘している。自己の人格や存在価値を他者から否定されたという認知により，自己の不完全さを痛感し，敵意は自己へと向かい，その敵意が強まると自己の身体を傷つける衝動に駆られるという一連の流れがあるように思われる。つまり，自己の身体を傷つける衝動の背景には，林 (2001) が指摘する完全主義者の過度の負の自己焦点づけがあるのかもしれない。

不適応的完全主義，ネガティブな反すう，抑うつ，攻撃性，自己への攻撃性の影響関係について

本研究の第三の目的は，不適応的完全主義から他者および自己への攻撃性に至るまでのプロセスについて，共分散構造分析を用いたモデルの検討を行うことであった。不適応的完全主義と他者および自己への攻撃性の関連について，ネガティブな反すうおよび抑うつを媒介変数としてモデルに組み込んだ分析の結果，不適応的完全主義が自己への敵意に至るプロセスには，不適応的完全主義から認知・情動的攻撃性を経由して自己への敵意に至るパスと，ネガティブな反すうおよび抑うつを経由して自己への敵意に至るパスが確認された。さらに，抑うつおよび自己への敵意から自己への身体的攻撃傾向への直接パスも確認された。

まず，パス係数の大きさから見て，不適応的完全主義からネガティブな反すうおよび抑うつを媒介するパスよりも認知・情動的攻撃性への直接パスの方が影響力が強かった。一方，抑うつを媒介するパスに関して，不適応的完全主義者は，ネガティブな反すうをすることによって，自己の不完全さが頭から離れず，不完全な自己を非難的に考え，抑うつ状態になり，自己への敵意が高まって，自己への身体的攻撃傾向に至ることが窺える。自己への攻撃性は摂食障害や自傷行為といった問題

行動の背景にある心理特性と考えられる。本研究の結果から，不適応的完全主義が自己への攻撃性に影響を与える要因の1つであると考えられるため，不適応的完全主義が自己への攻撃性に至るプロセスの視点から臨床的介入を考えていくことができるかもしれない。たとえば荒井・湯川 (2006) は，怒りを感じた出来事を日記に書くなど言語化するとネガティブな反すう傾向が低減することを見出している。この知見に基づくなら，不適応的完全主義者に対する自己への身体的攻撃への介入を考える際にも，ネガティブ事象に関する言語化は，ネガティブな反すうを減少させ，予防につながる可能性があると考えられる。

また，認知・情動的攻撃性から自己への敵意にパスが有意であったことから，不適応的完全主義者は，他者に敵意や怒りを抱いても，それを自己への敵意に転換する可能性がある。今後は，不適応的完全主義が敵意や怒りをもたらすメカニズムをさらに検討し，不適応的完全主義によって敵意や怒りが喚起されにくくなるような臨床的介入手法の開発が必要であると思われる。

研究の意義と今後の課題

これまで自己志向的完全主義と他者および自己への攻撃性の関連を直接検討した研究はほとんどなかったが，本研究では，敵意，短気，自己への攻撃性との関連が示されたことにより，自己志向的完全主義者の新たな不適応的側面が明らかとなった。自己志向的完全主義者の他者および自己への攻撃性は，自己志向的完全主義者の対人関係改善や自己への身体的攻撃の予防や治療のために，介入の必要な要因である可能性が指摘できる。そのためには今後，不適応的完全主義が他者および自己への攻撃性に至る詳細な心理プロセスに焦点を当てた研究が必要であろう。

しかし本研究は，同時点での質問紙への回答により因果を論じている点に限界がある。また，調査の対象者が大学生であるため，対象者を広げた検討が必要である。さらに，本研究で作成した自己への攻撃性尺度については妥当性を検討していないため，今後は妥当性を検討する必要がある。

本研究では，自己志向的完全主義の4つの因子それぞれと他者および自己への攻撃性の関連について検討したが，最近，伊藤 (2003) のように，自己志向的完全主義の「高目標設定」と「失敗過敏」を組み合わせて完全主義者を分類する試みが行われ始めた。この研究では，高目標設定高低群と失敗過敏高低群の4群に分け，失敗過敏のみ高い群が不適応に陥りやすい可能性を示唆した。このように，他者および自己への攻撃性との関連を検討する際にも，単に自己志向的完全主義の各下位尺度との関連をみるだけでなく，自己志向的完全主義の適応的側面と不適応的側面を組み合わせて完全主義者を分類し，関連を検討することも必要であろう。

引用文献

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦　治・坂井明子 (1999). 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性，信頼性の検討　心理学研究，**70**, 384–392.

荒井崇史・湯川進太郎 (2006). 言語化による怒りの制御　カウンセリング研究，**39**, 1–10.

Blatt, S. J. (1995). The destructiveness of perfectionism: Implications for the treatment of depression. *American Psychologist*, **50**, 1003–1020.

Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, November, 34–52.

Burns, D. D. (1999). *Feeling good: The new mood therapy*. New York: William Morrow and Company, Inc.
（バーンズ，D. D.　野村総一郎・夏苅郁子・山岡功一・小池梨花・佐藤美奈子・林　建朗（訳）(2005). いやな気分よさようなら――自分で学ぶ「抑うつ」克服法――　星和書店）

Dollard, J., Doob, L., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven: Yale University Press.
（ドラード，J.，ドーヴ，L.，ミラー，N. E.，マウラー，O. H.，シアーズ，R. R.　宇津木保（訳）(1959).　欲求不満と暴力　誠信書房）

Fedewa, B. A., Burns, L. R., & Gomez, A. A. (2005). Posi-

tive and negative perfectionism and the shame/guilt distinction: Adaptive and maladaptive characteristics. *Personality and Individual Differences*, **38**, 1609–1619.

Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (Eds.) (2002). *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.

藤　桂・湯川進太郎 (2005). 満たされない自己が敵意的認知と怒り感情に及ぼす影響　カウンセリング研究, **38**, 22–32.

秦　一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成　心理学研究, **61**, 227–234.

林　潔 (2001). 抑うつ傾向と関連するType A行動様式および完全主義的思考傾向の構成要因の検討　白梅学園短期大学紀要, **37**, 1–10.

Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456–470.

Hewitt, P. L., Flett, G. L., & Weber, C. (1994). Dimensions of perfectionism and suicide ideation. *Cognitive Therapy and Research*, **18**, 439–460.

東　真由美 (2007). 新しい完全主義尺度の構成　追手門学院大学心理学論集, **15**, 1–9.

伊藤菜穂子 (2003). ポジティブ・ネガティブな完全主義の相互作用の効果　日本大学心理学研究, **24**, 29–35.

伊藤　拓 (2004). 抑うつの心理的要因の共通要素としてのネガティブな反すう　心理学評論, **47**, 438–452.

伊藤　拓・上里一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討　カウンセリング研究, **34**, 31–42.

伊藤　拓・上里一郎 (2002). 完全主義およびネガティブな反すうとうつ状態の関連性――抑うつの脆弱要因としての完全主義についての再検討――　カウンセリング研究, **35**, 185–197.

Izard, C. E. (1991). *The psychology of emotions*. New York: Plenum Press.
（イザード, C. E.　荘厳舜哉（監訳）(1996). 感情心理学　ナカニシヤ出版）

大谷保和 (2004). 自己志向的完全主義の2側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討――統制不可能事態への対処を媒介として――　心理学研究, **75**, 199–206.

大谷佳子・桜井茂男 (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係　心理学研究, **66**, 41–47.

Saboonchi, F., & Lundh, L. G. (2003). Perfectionism, anger, somatic health, and positive affect. *Personality and Individual Differences*, **35**, 1585–1599.

桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係　心理学研究, **68**, 179–186.

鈴木常元・安齊順子 (1999). 抑うつ者の外面的および内面的攻撃性　心理臨床学研究, **16**, 573–581.

Tangney, J. P. (2002). Perfectionism and the self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride. In G. L. Flett & P. L. Hewitt (Eds.), *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 199–215.

Terry-Short, L. A., Owens, R. G., Slade, P. D., & Dewey, M. E. (1995). Positive and negative perfectionism. *Personality and Individual Differences*, **18**, 663–666.

辻　平治郎 (1992). 完全主義の構造とその測定尺度の作成　甲南女子大学人間科学年報, **17**, 1–14.

矢冨直美, Liang, J., Krause, N., & Akiyama, H. (1993). CES-Dによる日本老人のうつ症状の測定――その因子構造における文化差の検討――　社会老年学, **37**, 37–47.

横山知行・小山智子 (2005). 女子大学生における摂食障害傾向と怒りおよび完全主義との関連　新潟大学教育人間科学部紀要, **7**, 165–174.

― 2007.8.31 受稿, 2008.5.26 受理―

Self-oriented Perfectionism, Aggression, and Self-directed Aggression: A Mediation Analysis of Depression and Negative Rumination

Michiko SAITO[1], Tatsuo SAWAZAKI[2], and Hiroyuki KONNO[2]

[1] Graduate School of Psychology, Mejiro University
[2] Faculty of Human Sciences, Mejiro University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 17 No. 1, 60–71

This study investigated the relationship of self-oriented perfectionism, which had four factors of desire for perfection, personal standard, concern over mistakes, and doubt of actions, with four factors of aggression: physical aggression, anger, hostility, and verbal aggression, and two factors of self-directed aggression: self-directed physical aggression and hostility. Four hundred and forty four (444) university students completed a questionnaire. Results showed that personal standard was positively related to verbal aggression; concern over mistake to anger, hostility, self-directed physical aggression, and self-directed hostility; and doubt of action to hostility and self-directed hostility. Also, causal models were examined of self-oriented perfectionism, aggression, self-directed aggression, depression and negative rumination. Results of covariance structure analysis were as follows: Maladaptive perfectionism enhanced cognitive-affective aggression, which in turn enhanced self-directed hostility. Maladaptive perfectionism enhanced negative rumination and depression, which in turn increased cognitive-affective aggression, and then self-directed aggression. The results were discussed in terms of their implications for intervention.

Key words: self-oriented perfectionism, aggression, self-directed aggression, depression, negative rumination